

小学校最後のクラブで

昭和五十三年度 六年女児

私は後期、体操クラブに入った。別に体操が得意なわけでも、好きなわけでもない。それよりも、あまり得意ではないほうだ。こんな私がなぜ体操クラブに入ったかというと、第一に、仲の良い友達が入ったのと、それからもう一つ、どんなクラブなのか好奇心みたいなのがあったからだ。初めのうちは、

「きつと簡単よ」とか、「人間やってできないことはない」とうかれていたが、二回、三回と回をおうごとに、どうせできないんだという、いじけ心がでてきた。倒立前転のときだって、「できないからやらない」といっていじけてしまったりした。本当は、体操クラブにあきてしまっていたのかもしれない。ほかのクラブをみては、「こんなクラブよりは……と何度思ったかしのれない。」

何度目かのクラブのとき、ブリッジをした。そのブリッジというのは、前々から家でやっていたりして、わり

かし得意だったので簡単にできた。次のクラブもブリッジで、だんだんクラブが楽しく感じられ、クラブの時間が待ち遠しくなった。転回をしたときも、「他の人ができるのに、私にだけできないなんてありっこないんだと思ひ、がんばった。いつの間にか、「どうせ……という考えが消え、かわりに「くやしいという気持ちが生まれた。それに、同じクラスの人が三人もいるので「負けたくないという競争心も生まれた。いったん競争心というものが出来ると、そのことをやりとげるまで、そのことをなしとげるまで、というようにねばり強くなってくる。

学校で出来なくてくやしい思いをしたとき、家に帰ってから、フトンの上で何回も何回も練習する。出来なくとも出来るように、出来るのならもっとじょうずになるようにがんばって練習する。これがねばり強さというものではないだろうか。

私は、クラブがある四年生から手芸、演げき、たっ球と、私の得意とするクラブに入ってきた。そこでは、あみ物、発声練習、スマッシュの仕方などいろんなことをおぼえた。それらのクラブでもまとめののように、何かを作ったりした。だから、そこでも「できた」というよろ

こびを味わってきたが、苦勞して「やった」というよろこびは味わったことがなかった。それに、ねばり強さを要求されてもきつと、その時の私には、がまんできなかつただろう。

だから今、体操クラブに入ったということは、自分のためにも良いことだったのかもしれない。おかげで「くやしい、負けたくない」というような、自分や他の人に対する負けん気がでてきたのだ。他のクラブでは見い出せなかった何かを、この体操クラブでは見つけられたのだ。「できない、できない」という気持ちだが、「やるぞ、やるぞ」という気持ちに変わったのだ。この気持ちは、前の私には考えられないほどの変化だ。

この体操クラブは、私にいろいろなことを教えてくれたのではないだろうか。「くやしい」という負けん気や、できるまでというねばり強さの大切さなど、本当にいろいろなことを私は、この三年間のクラブ活動を、本当に楽しかったと考える一方、大切なことを教えてくれた。ということも忘れてはならないと思う。

とくに、この体操クラブの思い出は、苦勞して得るよろこびは、苦勞しないでよろこぶことよりも、最大のよ

ろこびがあたえられるということがよく分かった。それに、この体操クラブに入った私の動機のように、好奇心でもいいから入ってみることだ。そこで、思いがけず大切なことを勉強するかもしれないからだ。

私もこの体操クラブの思い出を、中学校に行っても、ちゃんと頭に入れておきたいと思う。